

分科会 2 「人材育成」

・セッション 1

「人材育成上の課題の検討・整理」

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

今日はよろしくお願いいたします。分科会の 2 で「人材育成」ということです。内閣府からお題をいただきまして、災害ボランティアセンターについての人材育成を、ぜひ取り上げてくださいということです。今回、多岐にわたる人材育成の問題の中から、災害ボラセンを通じて、そこにおける求められる人材像、あるいは、それをどのように育成するかということを考えていきたいと考えております。その手法として、整理をしてみました。

○これまでの人材育成議論の成果というのは、11 ページと 10 ページに事務局がまとめていただいた、かなり詳細なものがあります。それを私なりにまとめると、運営技術のいわゆるボランティアコーディネーター講座をやったからといって、人材が育成されるわけではないということは、皆さんが共通しておっしゃっていることです。思いであるとか、情であるとか、そういうものまで含めたトータルなものが必要だということが一つでした。もう一つは、同じ組織で同じメンバーでやっているわけではなくて、多様な人材があり、なおかつ地域ごとに多様なニーズがあり、災害ごとに多様な状況が変わるという中で、考えていくマネジメント能力というものをどういう形で育てていけばいいのかという問題意識もかなり共通してあるように思われます。それに対して、どのような方法でアプローチして人材育成をするのかという方法論はまだ見えていないということで、統一したある程度のプログラムも必要だろうというような問題意識と。私なりに簡単に 3 点ぐらいに整理させていただくと、人材育成議論の成果としてこういうものもあり、こういう課題意識が挙がっていると感じています。

○今日これから皆さんと一緒にやっていきたいことですが、ファシリテーターの権限で、一定の筋書きを考えてまいりました。まず皆さんの手元に新潟県中越地震のボラセンの記録があります。19 枚くらいある資料です。A 4 で非常に分かりやすく書いてあります。尊敬する長岡市社協職員がほとんど書いているのですが、非常に素晴らしい記録です。大体これを見ると、ボラセンの時系列で、どういうことが起こって、そのときにどういうことが困ったのか、あるいはどういう問題があったのか、それをどのように解決したのかというようなことが書かれていますので、これを見ながら、皆さんと一定のボラセン運営上の課題意識の共有を図っていききたいと思います。

なぜこれを選んだかということですが、これは非常に良質な資料と思ったのです。良質な資料とは、建前だけではなくて、本当のことが書かれている資料という意味です。それから、きちんと時系列によって具体的に書かれている。具体的に本当のことが書かれている。それでも書けないことはたくさんあったと思いますが、一定のことが書かれているということ。これが例えば隠れやすい失敗だとか、悪口というのは申し訳ないのですが、本音とか、そういうものも出てくるということですから、本当の状況に近い資料であると感じています。

これを皆さんに読んでいただき、「ああ、そうだったよな。こういうものだよね」というような暗黙知というものが、イメージが形成されるかと思います。これを形式知化するというプロセスですが、具

体的に言いますと、このところに知恵、教訓、失敗、うまくいったこと、あり得ないことだと思ったような、「へえ」と思われる、通常の状況では生じない、災害時だからこそ生じる、あるいはボラセンだからこそ生じる、こういうメンバーだからこそ生じる、そういった「へえ」というものを、どんどん発見していただきたいと思います。

簡単に言うと、赤線を引いたり、アンダーラインを引いたりしながら、「へえ」のところを発見していく。「へえ」一つについて、ポストイット1枚に記録していきます。例えば、震災当日、発生当日は土曜の夕刻で週休日であった。ライフラインは寸断され、通信手段の命綱ともいえる携帯電話は、一瞬にしてうんぬんで通話不能と。例えば、これで携帯電話が不能になる。これは例えば町の人と話していると、携帯電話が不能になると「へえ」なのですね。だから「携帯電話が不能になる」という、そういう事柄だけを記述していただければ結構です。全部を抜き書く必要はありません。携帯電話は一瞬で不通になったと。一瞬でというのが怖いですね。一瞬で不通になるということが、例えば「へえ」だと思えば、そう書いてください。そういう形で、「へえ」を皆さんに、それぞれ19枚の資料を見ながら、どんどん書いていただきたいと思います。

その後にみんなでその「へえ」を持ち寄ります。持ち寄って、「これが『へえ』だね」「これが『へえ』だね」「その『へえ』は、私もそう思った」というように、どんどん重ねて行って、それをグルーピングしていくと、KJ法というやり方ですが、そこに関係性がいろいろ見えてきますので、そういった形で整理をしたいと考えています。

その整理したものをどうするかというと、今のところ非常に優れた標準的な研修の素材といわれているのが、人と防災未来センターの「(防災)ボランティアコーディネーターコース」、これも熟読していただきながら、一度長岡のボラセンでのいろいろな問題と、こちらの(防災)ボランティアコースでの解決策を比較対照していただきます。なるほど、これならかなりのことができるなということが多分見えるでしょうし、一方で、ここについては少し足りないかもしれないということも見えるかもしれません。この(防災)ボランティアコーディネーターコースの内容を見ながら、これに加筆補正をするという形で提案ができればと思っています。

それが終わって、ボランティアセンター以外の人材育成の議論について、まとめをしていく。具体的なボラセンの人材育成の議論をしっかりと詰めた上で、全体の今後の防災ボランティアの人材育成について、話していきたいと考えています。

これを基に発表させていただきたいと思いますが、こういう素晴らしいメンバーと3時間みっちりこういうお話ができるというのは大変な機会で、多分一生に一度あるかないかということだろうと、私はメンバーを見て思いました。なおかつ、それが政府の一つの役割の中で、仕事の中でやれるということは、大変光栄だと思っていますので、一生懸命皆さんと一緒にやっていきたいと思っています。

皆さんは食事をして、満足な気持ちになっていただきたいと思いますので、早速始めようかと思います。ポストイットを皆さんに渡していただけますでしょうか。多分皆さんのことですから、一人最低20枚はポストイットを書いていただきます。最低ですよ。時間は今12時半ですが、30分見たいと思います。もし20分ぐらいでできたら、こちらの人防の資料の方を読み込んでいただきたいと思いますでしょうか。

最終的には模造紙は、ここで作業を、テーブルでやりますので、立ってわいわいとやります。金山さ

んもぜひ参加していただいて、20 枚書いてください。でも、20 枚は楽だと思います。

*** 以下、作業 ***

・セッション 2

「研修プログラムと課題整理との比較・さらなる課題検討」

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

次の作業を一緒にやっていきたいと思います。次の作業では、時系列ごとに「へえ」と思ったものをばたばたと押していきます。最初どうでしょうか。金山さんが一番最初に「へえ」と思った紙を読み上げていただけますか。順番です。大体同じようなものがあれば、張ればいいです。

金山（内閣府 政策統括官付参事官（災害予防担当）付参事官補佐）

では、最初の方から。7 ページ目。

ボランティアセンター立ち上げ要員の安否確認手順が必要。

災害時のインフラ。前提となる被害想定。被害の状況が多分見えないという問題。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

ライフラインが動いていないと、センターを開設できないとかという。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

インフラがやられたって、立ち上げなければ駄目なのよ。できるようにしなければ駄目なのよね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

建物がやられていたら無理だけど。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

合意形成はあっても、場所が確保されていない。ボランティアセンターの場所の話ですね。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

ボランティアセンターの場所は、最初は決まっていなかった。それでいろいろ議論した。立ち上げるかどうか決まっていなかったですね。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）
広いスペース、公共施設はすべて避難所。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員／財団法人市民防災研究所 理事）
同じです。避難所となっている。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
職員が震災が起きているにもかかわらず、通常業務、試験に行ったこと。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）
災害ボラセンの本格開設までの間、市役所の一室を取りあえず借用したというのが、11 ページに書いてあったのですが、市役所が場所を貸すという合意ができていたのだろうかという点に「へえ」がありました。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
「非常参集の仕組みが決まっていない」というのは、日常業務に行ったのと、ほぼ同じ。
携帯電話が重要な連絡手段となっていること。携帯がつながってから、非常招集をかけている。要するに、携帯電話は役に立たないといわれながらも、携帯を。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）
でも、その後段で、安否確認、困りごと確認を電話訪問でやっているのよね。だから、普通の電話も生きていたということよね。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員／財団法人市民防災研究所 理事）
携帯も使えるようになってからは、安否確認にも使えているという、時系列で変わってきていますよね。意外に普通の電話は、発災直後は通じたというのはあったじゃないですか。だけど、携帯の場合、一瞬にして駄目になっちゃうのですね。
要するにアンテナが駄目だと、継続的に駄目になるけれども、一斉にスイッチを入れることで駄目になるのは、時間差で入っていくんです。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
長岡市そのものに大きな被害があったという感じがしない。負傷者や救助の関係が一切ない。要するに大きな被害が、情報が入ってこないという言い方は、大きな被害が身の周りで起きているという雰囲気ではない。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員／財団法人市民防災研究所 理事）

情報が入ってこないから。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

神戸の職員で、阪神淡路大震災当日、自宅に被害がないのでそのまま又眠った人もいと聞きました。一度起きたけど、被害がなくて又眠ったという人。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

11 ページになって、福祉課の、市の福祉総務課が入ってくれば、本来は情報がだんだん一元化するのよね。災害対策本部に入っているから。11 ページで、ボラセンを立ち上げて、そこに市の福祉総務課が入ってきているけれども、市の福祉総務課で多分、災害救助法の事務はどこも福祉部門なのですが、災害救助費の単価を適用するとか、使わないとかという意見や着意が全くないところを見ると、災害救助法に関する知識がなかったのでしょうか。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

この方が多分、災害救助法関係をまだ知らなかった。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

このボランティア検討会の話し合いが整理つかない理由の一つに、被災した地元行政の固有事務としてやるものと、災害救助事務として国が担うものと、行政ではできない「すき間」を埋めるために、市民の人手と義捐金を使って動かすものとのすみ分けがきっちり議論されていない。いつもどこかで議論がぐちゃぐちゃするのだけれども、ボランティアでやるべきところは、要するに連携して民の金と民の人手で、行のすき間をどうやって埋めていくかの議論だと思うのです。それがないから、しょせんボランティアはボランティアでしかなくなっちゃうと思うのですね。行政としても連携効果が見えない。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

だから、行政が何をやるかということも、ボランティアとしては知っておかないと難しいと、効果的な活動はしにくいと。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

ボランティアコーディネーターをするときには、専門性を持つワザ（仕事）でやるものと、素人でもできるボランティアでやるものと、そのすき間を埋める所が重なって、ボラ本来のやるところの見極めができないように感じる。それがこの会がずっと引きずっている課題だと私は思っています。だから、過度の期待をしたり、責めたり、意見をたたいたり。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

事前の取り決めがないとか、ないない尽くしのスタートとか、その辺のことを今、出しておきましたが。私 11 ページですごく気になったのは、唯一個人名が出てくる「ハートネットふくしま」の吉田さん。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

事前の豪雨災害の経験が役立っている。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

それと、動ける。要するに休暇届を出さず、動ける立場の人ですよ。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

事前の豪雨災害というのが、すごく大きいですよ。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

事前の経験があったという話ね。事前の経験があったことが効いたという、それに関係するようなものはありますか。事前の経験があった。ハートネットが来た。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

豪雨水害の経験が役立っているという点では、全体の合意形成というところでも、見受けられると思います。特に、行政との連携という点では、この文章を読む限りだと、比較的上手くいっているように思えます。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

そうですね。顔が見えています。ボランティアの質。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

二日目にも、総務課と一緒に話し合いができるということも、事前かなと思います。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

これは大きい。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

市と社協が協同でセンターを運営したという書き方もある。そういう書き方が望ましいのかどうかは、私はちょっと実は疑問なのですが。

センターについての理解がすごくあるというのは、設置場所について広いスペース、分かりやすい場所、駐車場というのがぽんと出てくる話とか。その辺はすごく理解が深いですね。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

ボランティア。いつまでたっても、自分に何ができるか分からない、何かをしたい、できることはありませんかのボラ難民のような人がいつまでもいるという。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

社協を中心に動いていると、ずっとこの人は書いているのだけれども、実際はボランティアとの協働でやっているんだよね。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員 / 財団法人市民防災研究所 理事）

地味な活動を、文句も言わずに

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

最初にボランティアセンターに駆け付けた人というのは、一体どんな人なのかなというのは、個人的に知りたいですね。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

あと、駆け付けたボランティアさんの活動のイメージというのをここで書いていますよね。

ここで書かれている活動のイメージというのは、ちょっと違うという印象があります。ただ、普段災害ボランティア研修などを受けにくる人たちのイメージは、まさにこのイメージじゃないかと思います。この時、そうじゃないというのをどのように伝えたのかなというのは気になります。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

この人は、がれき等の後片付けの作業イメージが多数なのではといっているけど、僕はボランティアは被災地に駆け付けたときに、がれきの後片付けのイメージよりは、避難所というイメージの方が強いんだなと思って、これは違うなと思ってね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

多分、水害があつての直後なので、水害の活動のイメージが先についているのではないかな。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

がれきの後片付けのイメージなんて、地震の場合、ないよね。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

駆けつけてくださったボランティアさんのイメージと、ボランティアさんを受け入れる側の最初にやらなければいけないイメージがずれているわけじゃないですか。

災害ボラセンを立ち上げねばと思っている社協の職員は何とか体制を作らなければいけないと思っていて、駆けつけて来た人は、避難所でもがれきでも、要するに直接的に被災者の方々を助けたいと思って来ている。そんなずれがあった状態だったのにも関わらず、誰も文句を言わなかったというのはすごいと思います。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

でも、一番後ろで怒鳴っている人も出てくるじゃない。こういうトラブルはあるのよね。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

そういう方もいますよ。そういう人がまったくいないというのもおかしいですよ。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

こういう人が入ってくると地元住民はやりにくいから、ボランティアを入れない方がいいという話が、岩手ではあったと聞きました。迷惑をかけるような人を入れることがと。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

「スタッフを担った一般のボランティアさん」という表記が出てきます。おそらく、人材育成というところで考えてみると、「スタッフを担った一般のボランティアさん」を育成していきたいということなのではないかとおもいます。

しかしながら、「養成講座をやりたいのですが」と相談されたときに、「どういう人を育成したいのですか」と聞くと、イメージがわからないケースが多い気がします。「何だかよくは分からないけれども、災害ボランティアセンターを手伝ってくれる人を養成したい、育成したい」と。いきなり話が飛んでいますが、育成したいと思っている方は危機感を持っているのですが、具体的なイメージがわいていない気がします。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

私は逆なのね。養成したって、何時間かで身に付かないと思う。むしろ受けにきた人がどういう得意技を持っていて、どういう場面でその技が使えるかをきっちり把握して、受講生本人に自覚させる。何ができるか分からないけれども行くのではなくて、こういうことができるから、この時期に行くという人を育てる。こういう人を、こういう時期に欲しいという、被災地の時系列的推移とニーズをイメージ

できるセンター長を養成していく。養成講座は「ボランティアとして、あなたが被災地で生かせるものは何ですか」ということを自覚させる教育だと思います。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

ここに出ている組織図をやったら、1日の流れというのはきっとみんな「へえ」なんだろうなと。活動時間の話も、これもきっと「へえ」ですよ。夜、活動があるとか。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

そうですね。スタッフの構成や人数とかというのは、非常にイメージがしやすいので。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

これはすごくいいのだけれども、ボランティアセンターの組織図には、災害対策本部との連携もやはり記した方がいいなと。

でもね、やっぱり夜間の活動はいいと思う。ただ、どういう人を置くかは問題だけ。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員／財団法人市民防災研究所 理事）

この文章だけでは文句を言ったボランティアがいない。だから、ずっと従っているのだなと。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

いや、違うんだよね。そこは出てくるんだよ。社協が中心となって、うまくいっている流れしか書いていない。すべて書いてあるというけれども、実は長岡はもっと混乱したんだよね。

これはある種のやはりサクセスストーリーなのです。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

山古志班の設置。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

基礎情動的なところで、みんなが「へえ」なのだろうというので、食事の提供はしなかったとか、事前受け付けしなかったとか、宿泊も用意はしなかったけれども近隣が申し出てくれて実現したとか、この辺のことはきっとみんな「へえ」なのです。

金山（内閣府 政策統括官付参事官（災害予防担当）付参事官補佐）

ボランティア活動の支援はあったけれども、ボランティアへの支援というのはやはりないのかなと。その中で皆さんやっているということですね。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

有償でもやらないと、物乞いが出るんですよね。被災地のあそこでは食べさせてもらった、もらえないとか。

「お弁当を持っていないのだったら一緒に食べましょう」と、優しく声を掛けられたというけれども、本当はねだっている。被災者が自分たちの食事を作りながら、50食分、80食分作りましたという声が出てくる。それが死ぬほど苦しかった。真夜中まで支援者の食事づくり。そういう話が出てくる。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員／財団法人市民防災研究所 理事）

だから人材養成が必要だという話ですよね。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

各班のチーフが地元の土地勘と、これから先の活動を見据えてちゃんと作っている。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

最大60名ぐらいのスタッフになったという。このぐらい必要だという基礎数ですよね。

私はこれが2万人を2カ月のコーディネートに、最大60人というのは多いなという実感があるのですね。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員／財団法人市民防災研究所 理事）

私も多いと思う。

金山（内閣府 政策統括官付参事官（災害予防担当）付参事官補佐）

企業が資材を寄付してくれたという表記があったところは。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

共募の活動支援金の存在。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

一番僕が「へえ」と思ったのは地図の話。いちいちコピーするのは確かに、住宅地図、あれは大変だなと思って。それをパソコンでばっとできれば早い。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

ボランティア保険を県社協が負担。一応書いてあったので、それでいいのかという問題提起も含めて。
活動が長引くとボランティア保険の負担が大きくなっていくから、県社協はボランティア活動をすぐにやめたがるという背景もあると思いますよ。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

これは若干戻ってしまいますが、マニュアルだけでなく、経験とやる気が運営を支えている。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

19 ページの表。時系列でボランティアニーズが変わっていくという話。

これはセンターがよく理解していて、先に先に募集をかけていけばいい。そういう意味です。そうでなければ、ボランティアが来たときには、ニーズが動いてきているというミスマッチが生じる。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

エコノミー症候群の注意喚起は、私は「へえ」だと思う。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

危険度判定作業に合わせて、専門ボランティアと連携して、ボランティア活動を一緒にやってというニーズ。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

具体的なニーズの話ですね。こういうニーズの活動があったのだというような

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

26 の地区社協を訪問したというのはすごいなと思いました。あっさり書いてあるけれども、結構これは大変なことだと思います。混乱の中でちゃんと足を運んでお願いしたというのは、本当にすごいことだと思います。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

企画チームというのはいかにも役所ですよ。要するに遊軍隊ですよ。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

あと、スタッフの疲労の色が濃くなったといって。引っ越しをやるかどうかという。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

大体ボランティアが疲れてくると、これはおれたちの仕事かとちょっと戦うようになる。ごみは嫌だ、農業は嫌だ、あれは嫌だと、自分の体力の限界を人のせいにする。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員／財団法人市民防災研究所 理事）

だから、このスタッフ間で考え方が分かれたというところ。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

これはまた被災地に居着いちゃう人に問題が出てくるの。この応急というのが。日帰りからは出ない。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

仮設にテントを立てたというのが「へえ」と思いました。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

被災者支援金制度の範囲というものを。私も知らなかったので、「へえ」でした。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

サテライトとトイレの確保までした。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

災害ボランティアの数が多くて、行政が準備したトイレが、住民が使うのに足りなかったという声もありましたね。23 ページ。ボランティアコーディネーター。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

これは長岡の素晴らしいところだね。転換が早かったからね。普通、これはやらない。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

ボランティアコーディネーターにはこういう人が必要だという。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員／財団法人市民防災研究所 理事）

非常時に身に付くものではないということ。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）
展開を予測する能力。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員／財団法人市民防災研究所 理事）
日常がいかに大事かというところは、そこを強調したい。

金山（内閣府 政策統括官付参事官（災害予防担当）付参事官補佐）
10代、30代がほとんどだった。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）
阪神・淡路大震災でも7割方は学生ですよ。学生ボランティア。
それから95ページで、ボランティアニーズの掘り起こし、地元組織の連携に躊躇したという。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）
ニーズが最初予想したよりも数が少なかった。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）
町会、民生委員に協力しにくい環境もあったのかもしれません。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
最初にニーズが多かったら、大変だね。要するに生活支援がボランティアの基本だから、最初にニーズが入ってくるわけがないんだよ。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員／財団法人市民防災研究所 理事）
ところがこの記述だと、「へえ」と思ったのは、普段、私たちはそう思っているけど、この書いた人たちが「来ないのが意外だ」というような書き方じゃないですか。そこで「へえ」なのですよ。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）
要するに知った人が間に入らないと他人には直に頼めないという。
ニーズは要するに物理的なニーズではなくて、心の重さのニーズへの対応。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
要するに、和ませるという話に。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）
ボラセンと行政の災対職員の交換の話が、提案として出ていました。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

これもそうですね。人の連携ですね。こういうところはやはり内閣府にお願いして、この方がうまくいきますよという情報を。金がかからずにできる、効果的なことを。こういうことだと思うのですよ。そうすると、自治体でもお金も付けやすいし。それから、ホームページの維持。これはボランティアや何かに任せずに、行政が責任を持ってやる。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
いや、無理ですよ。行政に責任を持たせるのは。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

それは維持管理よ。だって災害救助費が使えるのだから。ボラがバラバラに出す情報は被災地の負担を重くする。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員 / 財団法人市民防災研究所 理事）
募集していない資機材が突然大量に来了。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）
この辺の情報発信の問題も一緒ですね。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

コーディネーターの役割として、被災者や被災地のニーズに適應したさまざまな活動のコーディネートができること。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

地元の人を入れるというところと、継続性確保とか、情熱を持ってとか、その辺の三つの条件が。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

地道に長期的に活動するぞという覚悟が必要。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

単一の組織では限界があるのではないのでしょうか。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

被災者がストレスを感じる。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

被災家屋の後片付けに協力できなかった。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

危ないこと、怖いことをやりたくないというボランティアは、来なくていいという話につながる。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

派遣するところの問題じゃないですか。安全性確保が自分たちでできないからという。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

やりたくないというのは、要するにそれは裏返すと、物見遊山のやつは来るなという意味であって、別にそういう否定的なあれではないですね。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

被災地社協にしかできない活動。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

なぜ社協がという部分。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

ボランティア個人の考え方とか、教育体制とか、サポート体制。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

ボランティアがボランティアでいる間は、私はやっぱり課題は残ると思う。行った先では奉仕。相手の満足に添う覚悟。

休憩

・セッション3「望ましい研修プログラムの検討」

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

今出てきたのは、やったのは、災害ボラセン運営上の課題だとか、うまくいった、失敗したなどの話です。これを人材育成の問題で整理をしていきたいと。人材を育成するという観点から、例えば一番最初に携帯電話が止まるとか、ライフラインが動かないとセンターの立ち上げができないとか、そういうことを、あるいは、センターを立ち上げる場所が最初に決まっていなくて、そういう事前の知識や経験、マニュアルをそろえるとか、そういうことを知っていて準備しておく人が当然必要だと。やはり事前にそういう知識、経験のある人が必要だという、そういう事前の災害ボラセンを立ち上げる上での知識、あるいは経験といったものを研修等で補える部分も一部あるのではないかというようなイメージです。ですから、人材育成に必要な項目といったときに、ボラセンに関する事前知識と、取りあえずしておきました。

そういう形で全体を眺めながら、ちょっと議論を進めていければと思いますが、非常に重要なポイントかなと思って見たのは、この合意形成とか、よその市の総務課と連携をしたとか、そういった他者との連携。「ハートネットふくしま」の吉田さんが来たとか、こういう合意形成を上手にやるとか、ほかのところを上手に使わせてもらいますとか、ボランティアの設置場所。これは設置場所についての知識ということかもしれませんけれども。こういうことをぱたぱたと決めていける人。調整能力というのでしょうか。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

ネットワークがあって。停電だから発電機を借りようとか、コピーはここから借りようとか。立ち上げにはやはり地元でね人も物も揃えられるキーパーソンになれる人ですよ。核になるのは。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

例えばこの場合は社協ですが、社協だけではなくて、役所だろうが、ボランティアの組織であろうが、それから地域の町内会、自治会なども含まれる。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

そういう人を見いだせる、キーパーソンをつかまえている人。キーパーソン同士のつながり。別に社協の中にいなかったっていいのですよ。この人に頼めば、これがそろえるということだと思うのです。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

まず本人がキーパーソンであるということで、まず、よきキーパーソンであるということですよ。同時に相手方にも、連携先にもよきキーパーソンがいなければいけない。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

この人が優れていれば、相手は動きます。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

良きキーパーソンになれる人は、講座では養成できない。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

これがなければ社協は務まらないです、トップは。だって、地元でお金を集めて、人を動かして、場所を借りて活動している。日常やっているのだから。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

この、よきキーパーソンという存在は極めて重要。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

研修をやるときに、そういう人を選んでやるという。つまり研修をやるときに、キーパーソンの人が全然研修を受けていなかったら意味がないという意味で、キーパーソンが重要だと。よく研修やると、およそ関係ない人ばかり集めて研修をやっているのがあるじゃないですか。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

こういう人がいても、周りが評価して位置付けてやらないと動けないのよ。動ける仕組みを作っていないと。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

澤野さんが今おっしゃってくださった「誰を対象にこの講座をやるのか」というのは、すごく重要だと思います。ただ例えば区報で流して募集するとかじゃなくて、「受けてもらいたい人は誰ですか」と講座を企画する人に聞くと、出てくるのですよ。だから「その人を呼んだらどう？」という話をよくするのですが。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員 / 財団法人市民防災研究所 理事）

受講者は自分が選んで受講しますから、本当はそういう適任者ではない人まで来ているじゃないですか。そこが困るのですが、言える範囲内で、私なんかは講師として行ったときは、はっきり言いますよ。「コーディネーター講習を受けたからコーディネーターに適任の人ばかりではない。それは時間がかかるけれども、皆さんが決めること」と言って、やはり動いているうちにだんだん自然淘汰されていく。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

例えば3時間の講座で行くでしょう。そうすると、2時間は話すけれども、1時間はみんなどういう仕事をして、どういうふうに生きてきましたか、地域でどういうふうにかかわってきましたかと、一人一人自己紹介させると、すごく見えてきて、それがボランティアとしてこういうふうに関に立ちますよと、ちょっと色付けしていくだけで。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

やはり受ける対象ですよ。だから、いざというときに、受けておいてもらわないと駄目ですよ。結構、ボランティア講座というのは社協でも幹部の人が受けていないんだよね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

だから、講座の対象者というのが実はまず大事なのだというね、人集めの段階で。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

だから、その対象者の方にどう動いてほしいかということを考えて、対象者を選ぶわけですよ。それをしないといけないのですよね。だから、啓発の意味で、一般の人に広く知っていただきたい知識としてやる講座と、何か地域で担っていただきたいために集っていただくための講座は別なので、そういうことがちゃんと理解できていないといけないということですよ。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

選挙と同じで、なってもらいたい人に立候補してもらわないといけないですね。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員 / 財団法人市民防災研究所 理事）

本当、そういうこと。それがうまくいかないから、悩んでいるので。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

少なくともこの人材育成が、センターをいかに動かして運営させるかを目的とする人材育成ならば、もうセンターを担うべき人たちとか、あらかじめ、予定されている人を軸にやるのが一番効果的。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

平常時のボランティア活動をしている人たちに、要するに長く継続して地元で信用を集め、平常時にも非常時にも、平常時と同じ活動をやってねという意識付けをして、ボラセンターに入れる仕組みづくりをしている。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

地域で地域とのコーディネーターとして、地域にいてくれた方が助かる。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

地域のことで手一杯になってしまうから、災害時には災害ボラセンには駆けつけられないけれども、研修は受けて下さっているというのがいいのかもしれない。

研修を企画するほどの人に聞くと、そういうキーパーソンを知っていることが多い気がします。あそこのおじさんは、そういう人だとか、あそこに〇〇というおじさんがいるとか、■ ■というお婆さんがいるとか。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

平常時の活動をしているトップは一人ではなくて、大体複数だから、地元とセンター行ったり来たり。正副役員が現地とボランティアセンターに交代で入って、行ったり来たりですよね、大体。ローテーションで。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

運営の対象に、運営する側だけではなくて、運営する側として必要な人も入れるかどうかという問題。町会のキーパーソンとか、センターを理解してもらう意味でね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

うちの地域であまり知識のない人たちに集ってもらい、災害時のボランティアセンターを立てるときに、人材を地域からどうやって集めるのかと質問すると、みんな自治会長という話になってしまうわけですよ。それは無理だろうと。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

でも、自治会長を平常時入れないと、「おれを入れないのは、組織として動かさない」というのがある。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

都内の町会でもすごく一生懸命やっている町会などは、「うちの町会からは、災害時、必ずボラセンに一人出す」と言っているところもあります。だから「研修を受けさせる」と。町会長が直接声をかけて「受けて」ということをやっているところもあるので、町会長にやはり話をして、町会から派遣をするというか、そういう形でもいいのではないのでしょうか。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

ボラセンと行政のつながりは、町会長という役職がすごくいいですよ。町会の要請があってというのが行政は動きやすいのです。それはいくら有能でも、鍵屋さんという名前が出て、秦さんでも駄目なのよ。〇〇町内会からでないと。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

気になったのは、何もやっていないのに、36人駆け付けてくれた人という、これをどう評価するかということです。最初に駆け付けてくれた。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

36人の資質を、どういう能力を持って、どういうことができるかという、見極めをどういうふうに行ったかですね。このときは、ボラセンの配置を決めたり、物をそろえたりとか。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

その場にいるというのが、その時点では最大の能力。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

要するに作業員ですね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

作業員というレベルとは、随分イメージが違いますよ。電話の受け付けをやっているとか。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

地域の人なのですね、まずすぐ駆け付けてくれたという人は。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

地域の人だったのかな、この36人は。

近隣とか県内という書き方ではあったけれども、地元で活動しているというような雰囲気書き方ではない。ボランティアにも全然縁がなかったみたいな書き方だったから。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

神奈川県下にも約1名知る人で、被災地と聞くと同時に駆けていきたいという人はいますね。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

こういう思いを持つ優れた人材というのが、やはり絶対必要だよ。頭だけでは動かないわけだから。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

よきキーパーソンは、そのときはよきキーパーソンではなくても、これを機によきキーパーソンになる人もいっぱいいると思います。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

変わっていくよね。だから、キーパーソン予備軍だな。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

キーパーソンという人が重要なので、同時に、やる気があって、センターを動かす、何というか、必要なニーズに応じて動ける人が。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

それは大事ですね。素直に動いてくれるというのはね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

素直に動かせるキーパーソンがいたのだろうかと、僕はどちらかというと、そういうとらえ方なのですよね。よそから人に受け付けを任せるとか、電話を任せるなど、そうそう普通の社協職員では決断できない。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

最近、でも、いろいろな被災地でそれを見ているから、イメージとしては「住所と名前を取りあえず書いてください」とか。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

裏がある。要するに、社協のイニシアチブで動かない人たちも大勢来たわけだから、現実には。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員／財団法人市民防災研究所 理事）

さっきの豪雨災害の経験がものすごく役に立っている。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

だから豪雨災害で。でも、おかしいな。豪雨災害でもないのだよね、来ている人は。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員／財団法人市民防災研究所 理事）

受け入れ側がそのイメージを体得していたということは。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

やる気のあるよき経験者。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

多分ここでいろいろなメンバーがいるので、その人に対応して、その人たちが対応したのではないですか。社協の職員が対応できる人と、吉田さんが対応できる人と、行政が対応できる人と。多分入れ替わり立ち替わり、その36人の人に対しての、対応する人が替わったのではないですか。一人がではなくて、その相手を見て、それぞれが、自分が「あの人は得意」ではないですが、そういうので対応が替わったのではないかなという気がしますけど。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

駆け付けやすいのは、土曜日の夕刻でしょう。次の日は休みでしょう。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

そういう意味では時期的なタイミングはあるかもしれないですね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

それと、長岡はほとんど被害が軽微だったから、人が来やすかった。道路系が。ライフラインもすぐ復旧しているし、道路だって寸断されていないし。小千谷とか川口とかとの違いは。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

要するに、軽い、参加しやすい。重装備でなくても。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

では、次へ進んでいきます。人の問題、人材育成の問題。嫌な仕事、夜間の問題、トイレの問題、嫌な仕事を引き受けるみたいなイメージではないですね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

何かニーズ系の話は、時系列で変わっていくという。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

こんなニーズがあるのだということは、多分いろいろな講座の中で、あまり取り上げられていない気がするのですね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

具体的な。非常にバラエティがあるという言葉はあるのですが、では、どんなバラエティがあったのかという事例はあまりみんな知らない。だから、そういうのも、とにかく事例として用意してあげるとするのは、講座の中で必要になるのではないかと。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

だから、被災しても、日常必要とされる事柄はすべて必要とされることだという理解が大切です。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

そんなものがボランティアセンターに来るのだということは、やはり現場を知らずに講座だけ受講しにきた人たちはイメージが付かないですね。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

また、市民には、ボランティアセンターに行かなくてもいいようにしなさいという。寄付も大切な仕事で貢献。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

僕は講座の中で、全部をこっちが教えようというのは難しい気がしています。山本さんの企画を見ても、全てを教えるようなことはしていないじゃないですか。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

ただ過去の事例として、こんなことがあったというデータを、やはりまとめておいていいと思います。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

それは絶対にあった方がいいとは思いますが。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

要するに、ニーズは時間とともに変化するという。このマニュアルで読んでいて優れているのは、そのあれが、典型的にというか、うまい具合に複合しないで切り替わっていつているというか。普通はもっとぐちゃぐちゃなのだけど、これは書き方もそうかもしれない。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

ニーズを読める人という感じなのかな。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

時系列的にそのニーズは動いていくよと。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

そろそろ仮設住宅だなとか。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

だから、ボランティアとして必要な資質も変わっていくよということを。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

ニーズやその変化が読める人。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

「災害のイメージができる。被害が移ることをイメージできる」が、やはりキーパーソンに必要なだと思います。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

キーパーソンの資質として、いろいろなニーズがあって、しかも刻々と変わっていくということを知っていればいいような気がします。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

行く側は、自分は何ができるかを考えて、自分が参加するのはこの時期からだという見極めが必要だと思いますよ。何ができるか分からないけれども、取りあえず行こうというのは、私はボラ難民だと思っています。本人の趣味で行くだけで、地元にとっては迷惑でしかないわけだから。自分は何ができるかを考えて、ならば、どの時期、どういう装備で行くかと考えて、初めてボランティアだと思うのです。わあっと沸き立つようにとりあえず駆けつけるは地元負担となる。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

あなたの持っている能力は何ですか、使える時間帯と使える資質は何ですかということを分からせることだと思います。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

専門性を生かすというのは、確かにそのとおりですね。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

それは別に資格だけではないと思うんです。

寝ずに長く働けるとか。だけど、知的労働はできるけれども、長期的体力はないよとか。だから自分のできるのは何ですかという、自分を知るのはボランティアの一番大切なことだと思っています、私は。あと、ボランティアをやりたいのに「おれに資金を寄付してくれない」と怒る人がいる。これもちょっと。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

ボランティアコーディネーターのところで、彼が一生懸命考えてくれたのが、先の展開を予測できるということと、地理が分かるということ。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

ものすごいスーパーコーディネーターの養成であれば、この辺の話になってくるのですが、いわゆるボランティアセンターのいろいろな業務を担えるスタッフというレベルで考えれば、ここまでは僕は要らない気がします。

みんながこれをできればいいのですが、多分3人これができる人がいると、もう大げんかになると思うのですよ、センターの運営方針を巡って。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

私は、初期は地域が分かって、人の顔が見えて、これから先こういうことが必要とされることが予測できることですね。この地域は年寄りが多いし、この地域は障害者もいるしと、予測ができる。それから、道路はきっとこの辺は駄目だねと。この辺はがけ崩れがあるねとか、「読める」は初期段階で必要だと思います。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

要するに、それは地域のことに詳しい人ですね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

詳しい人もいていいのですが、例えばボランティアを送迎するのだったら、その運転手も要るわけじゃないですか。それもスタッフとして。そんな人も養成しておかないと、さまざまに気配りできる有能な人が車を運転しては駄目なわけで、もっと幅広く人材は確保しておかないと駄目ですよ。そういう人たちにどんな知識を持っていてほしいかという話じゃないですか。自治会長さんに持っていてほしい情報とか。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

極端なことをいうと、震災時のボランティアは、駆け付けてくれる人なら誰でもいいですよ。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

この資料はすごく使えるし、いいなと思いました。大分県の村野さんが企画された講座と、三重の山本さんが企画された講座。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

組み合わせると出来上がりみたいなのがあるところがあって。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

本当にそうだなと思いましたよ。村野さんの講座の目的などを見ると、地域住民として防災意識を根付かせながら、日常の地域連携づくりの重要性を啓発しているようですし、ここにはコーディネーターとか、何かすごいスキルとかを習得しようというのではなくて、ちょっと面白くて少し得するプログラムになっているように思えます。

対象も地域住民とか社協の災害ボランティア登録者とか、自治委員、民生委員、ボランティア市民活動登録者など多種多様。

こういう講座は、小さな気付きの第一歩になるじゃないですか。

山本さんの講座は、少し、半歩進んだ形なのかなと思いました。でも「コーディネーター養成」とは書かずに、「コーディネーターを知る」というところでとどめておいて、ほんのちょっとレベルが上がったような形なのかなと思います。

全社協がやっている講座や、人防の講座というのは、もっとレベルが高いというか、対象者を限定した講座という印象があります。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

要するに、やや議論が手の問題に流れすぎたから、やはりボランティアとしての基本的精神というか、資質というか、心構え的なものが、やはり研修の中にはないと、ともすると手の問題になってしまうのですね。

今日の議論で言うと、ともすると手の問題になって、本被災者という者がいて、その人たちのために

どう動くかという基本精神みたいなものをやはりどこかで教えないと、極端なことを言うと、手の問題さえうまく回していけば、センターは回るのだと思うのですが、でも、実際に最初の三十何人もそうですが、やはり被災地のために何かをしたいと集った、何というか、その辺の基本精神とかボランティアの心の持ちようみたいなものをどこかでちゃんと教えないと、マニュアルの延長みたいになってしまうから、やはりそこはいいのではないかな。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

ボランティアの心もそうなのだけど、そこから先に行ったときには、やはりもう一歩進んで、ある程度自我を抑えて、奉仕に徹する。一人の駒にならないと全体が機能しない。その覚悟がないと「それはできるけれども、これはできない」とか、「それはやるけど、これはやらない」とかということになると思うから。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

でも、そういう人がいてもしょうがないですよ、ボランティアだから。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

ボランティアというのは結構、発意からして自己満足の部分がある。そこから先は少し「奉仕」のところまで意識を高めて、自己犠牲のところ少し踏み込まないとできない。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

だから、ボランティアはこうあるべきだという意味ではなくて、こういう被災地のためのニーズに、そういう基本枠みたいなものを教えておいて。あまり「こうあるべきだ」というと、狭くなってしまう。というか駆け付ける人にそこまで要求しても、またそれをいちいち説教しても始まらないから、だから基本的なボランティアとしての心得ではないのだけど。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

イメージとしては、すそ野を広くしていくための取り組みと、それを伝えるコンテンツみたいなものが一つ重要だろうと思います。それが村野さんや山本さんがやっているような、地域の住民を中心とした、そういう養成講座みたいなものは常に必要であって、これは非常に意味がある。もう一つは、やはりボラセンの混乱を防いで、被災者を効果的に支援するための、レベルを上げていくというか、高くしていくという方向性で、では、このためにはやはり当然このレベルの人も必要、このレベルの人も必要、さらにこの超トップも必要ということの、ここをこういうふうにしていくための人材育成ということも、やはり考えていかなければいけないだろうと。こっちを広げていくのも必要。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

だから、底辺を広げると、専門性を持って質を高めていくことが大切。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

この広げていくという、抽象論でいえばこうなってしまうて、これだと簡単なのですが。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

ロジ担が入って、計画論があると思います。必要なときに必要な数をコントロールできる人の養成。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

抽象的ですが、僕はすそ野を広げていくための講座をやった方がいいのではないかと考えています。講座を企画する方だって、まだすそ野に近いところなのに、頂上を目指しても無理が大きいんじゃないかと思っています。それならば、すそ野を広げていく方、みんなで広げていこうというのをやりながら、やっていく中で本人が知らない間に上がっていくのが良いのではないかと僕は思っています。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

そのすそ野を広げるときの講座の中身の手法が、今すごくセンター運営に偏っているというのは、全体の会議でも出てきているけれども。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

センター運営に、このすそ野の問題では、偏っていると。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

偏っていったらというものが、すごく課題になっている。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

取り掛かりはここかもしれないのだけれども、これをやれば終わり、こと足れりとする傾向があるのではないかということは問題。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

要するに、点で終わっているということだよね。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

阪神・淡路大震災のことを見ると、呼び掛けなくてもあれだけ、140 万人という、私はある意味、そういうきっかけがあれば集まりやすい人間性というか、国民性があると思うから、やろう、やろうと広

げる努力よりも、こういうときにはこういう活動、こういう活動という、何をするかを少し。立ち上げを一つ、あなたは何かができるか日ごろから考えてみよう、何かできることを考えようという意識付けが必要だと思っているのですよ。ボランティア難民を作らないために。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

逆にいうと、研修で今のすそ野の話もあったけれども、もう一つ重要なのは、あまりセンターはこうあるべきとか、こう作るべきとか、こうやるべきを入れ過ぎると、それが実際のときに邪魔になる。というのは、やはり現実の目の前の変化に対応するのが基本であって、こうあるべきだ、こうだを逆に押し付けてしまうと、そこで余計研修を受けた人の方が、かえって要らないみたい。どこかであったけれども、「これは神戸のやり方なんだ」と言って、「ここはすみません、新潟だ」と言いたかったけれども言えなかったという世界があるように、そういう中身というのか、あまり形式のこれをこうだと押し付けるのではない、柔軟的な。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員 / 財団法人市民防災研究所 理事）

講座の中でも、災害はそれぞれ顔が違う、みんなの顔が違うように、災害の顔も違うんだよということを、やはり講座の中でしっかりとっておかないと、受けたからこれですべて皆さんがマスターしたと思ったら大間違いということも、講座の中でしっかりと行わなければいけない。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

マニュアルとこれを見て、「あ、こうやればいいんだな」と思ったのが運のつきで。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員 / 財団法人市民防災研究所 理事）

邪魔になるマニュアルは作ってはいけない。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

「何もできないけれども現場に行く」だったら、「行かないでお金を出す方がずっと親切よ」という選択肢が、今、中高年がいっぱい町にあふれているでしょう。「家にいないでどこか行けと言われているから」と来る養成講座受講者がいるのですよ。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

いいじゃないですか、それだって。それを排除したら駄目ですよ。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

それは講座なのだから、そこは機会としてとらえてあげないと。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

でも、一人一人「何ができますか」と言って、「僕は会社で経理課長をやっていた」とかね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

でも、そういう暇な人が、いざというときはボランティアで頑張ってくれないと地域は守れない。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

だから、そこから先ね、じゃあ、そのスキルを使って、どういう働きができるのかという。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

暇というのもスキルなのですよ。暇は資源。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

セルフマネジメントができる人というのが、まだ少ないのですよ。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

今、ボランティアの重要なスキルは暇だということ。いや、そうじゃないと、被災地でのボランティアというのは、暇な人じゃないとできない。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員 / 財団法人市民防災研究所 理事）

そう、確かに。ロジシカ行かないよね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

だから、若者が来るわけでしょう。働いている人は難しい。

重要な資質だよ、暇だというのは。馬鹿にするような意味でとらえているけれども、考えによって一番重要な資質だよ。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

暇を作れる人ですね。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員 / 財団法人市民防災研究所 理事）

だから、心身共に元気であれば、年にかかわらずOBの人を狙えと私はいつも言っているのですよ。

地域にいるOBの人たち。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

非常に有能な、外国でこういう活動をしたとか、気象庁でこういう仕事をしていたとか。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員／財団法人市民防災研究所 理事）

そういう人をどれだけ普段から担当者が一本釣りしているか。それがとても大事。

・振り返り・まとめ

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

そろそろ時間が心配になって、3時に終わって発表をしなければいけません。でも、何となくこの図で、大体すそ野を広げることの重要性和、それからスーパーな人を育てていかなければいけないということの両方の意味があって、この感覚からいくと、まずは事前知識、経験というのは、一定の職業にある人は必ず持っているなければいけないのだと。こういうのは必要なのだということで、これについては一般的な研修は必ず必要ですよということだと思ふのです。次が本当に重要なトップ級の人たち、運営の実務責任者みたいな人たちというのは、よきキーパーソンであり、どちらかというと、この人に受けてもらいたいとほかの人が言うような人、ほかの人に災害時には運営をやってもらいたいと思われるような人に、やはりきちんとしたボラセン運営の知識なりを受けてもらって、運営ができるように鍛えていく、いろいろな人とネットワークを組んでいってもらおうというようなことが大事なのかなということ、は、一つの方向性として。

それから、すそ野を広げるということだけではないかもしれない、もしかしたら中堅かもしれないのですが、やる気のある経験者、よき経験者みたいな方々をこういうよきキーパーソンに引き上げていくみたいな、何とかやっているうちにだんだん成長していくみたいな、成長の過程が描けるような、そういったキャリアパスみたいなものも。上昇するということではなくて、よくなっていくというのですかね、さらによくなっていくというのですか、そういうキャリアパスみたいなものが、この人たちを中心にあるのかなということです。

それから、ニーズやその変化を読む。どちらかというと、これはスーパーなキーパーソンも必要なのだけれども、専門的に、例えば防災の研究者で、何度も場数を踏んでいて、次にこういうことが起こる、次にこういうことが起こるということをちゃんと知っていると、国の防災の責任者とか、県の責任者とかみたいに、次はこういう手を打っていかなければいけないなというような、そういった人たちがというのが、支援することによってかなりいい感じになるのではないかと。ということ。

あとは専門性を生かした電子媒体とか、地図とか、心のケアとか、ある程度の専門性を生かしながらかやしていくという場面。自分の専門性を生かす、専門性を持っている人にボランティアマインドを持ってもらう、災害時の支援をしていただく。

それから、あまり出てこなかったのですが、ボランティアを支援するという気持ちを持った人を、なるべくボランティアファンを増やしていくと。災害時のボランティア活動というものをよく理解し、お金でもいいし。

そういう意味で、支援する人材というものをどういう形で、育てるというのも変だけれども、見いだしていくかと。どちらかというと、育てるというよりも、見いだしていく、見いだされた人が自らステップを登っていくというイメージでしょうかね。そういう人は既にいるのですね。そういう人を見いだして発見していく。その人たちが自らの意思で成長していく。それらを成長すると。こういうステップを支援するプログラムというのが何らか必要なのだろうというような、強引かもしれませんが、イメージですが、どうでしょうか。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

あとは、こういうものに参加しながら、その体験を通じて日常生活の中で、家族なり、近隣なり、ネットワークの中で伝えていくという、PDCAサイクルをきっちり持って、災害を知る、ボランティア活動を知る、被災地を知る、減災のために近隣に伝えるという、そういう連続した考え方がすごく大事だと思うのですね。そうすれば、若いときは体力と知力を使って、年取って寝付いたら、お金で支援する、志で支援するという。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

そういう意味では事前知識的な面で。そういう区分けでいえば、事前知識でちゃんと災害とか地域のことを教えるかどうか。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

被災後 10 日間ぐらいの新聞の記事を教材にすると、非常にいいのですね。10 日間どういうふうに動いていったかというのが見えるから。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

そもそも災害を経験していない、災害のイメージのない人に、いくら説明しても分からない部分があるから、その辺の前提は要るね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

今までの話と全然違う視点で、実は私が事前に考えていたのは、プログラムを作る人を支援する資料が欲しいなと。

実は先ほど言ったニーズのデータが欲しいというのはまさにそれで、例えばボランティアセンターの立ち上げ訓練をやるときに、ニーズ情報を張り出すのですが、100 個考えるのは大変なのですね。だから、過去こんな事例がありましたというのがずっとデータベースであって、その中からピックアップできたら楽だなという、すごく単純な思いもあって。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

僕はもっと単純に、その 100 個とかそんな、100 件の依頼はあっても、100 種類ではないのですよね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

そうなのですが、具体例として、こんなちょっと変わったものもあったよとか、こういう時期にこんな具体的なニーズが出てきたよという事例を知っているだけで、随分違う。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

でも、それは自分で 100 考えるのではなくて、障害者なら障害者、高齢者なら高齢者に、日常何が必要かというものを outsourching させていくだけで。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

高齢者や障害者は、災害時のイメージができていないから本人たちは気付いていないのですよ、自分にどんな具体的な課題があるということ。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

まとめのイメージはだいぶできてきました。さっき言ったように、求められる人材というイメージがありますよね。その求められる人材、あるいは役割、人材というものがあって、それを、さっきのすそ野とこれが中心になるのかな。すそ野を広げていく活動。それから、これをスパイラルに上昇させていく活動というイメージがあって、求められる人材があって、それをどういうふうに具体的にやっていくかというところを見いだすとか、成長する、支援するプログラムを作っていくみたいなイメージなのでしょうか。それではちょっと物足りないですか。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

まじめな話、ここにいる人たちの仲間だから、ある程度、鍵屋さんの頭にどういうまとめのイメージがあるかという、イメージの話ですよ、中身ではなくて。それを言ってもらった方が、まとめるのはまとめやすい。やはり組み立てている人のイメージはすごく重要だから、それと懸け離れても多分まとめにくいもの。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

そうですね。人材育成のための新しい提案をしようということを考えているわけですよね。だから、中心概念はやはりこういうことだろうと思うのです。もしかしたらそんなに新しくないのかもしれない。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

古典的な提案かもしれませんね。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

古典的な提案かもしれないですね。だけど、あらためてそれが価値を持つかもしれないですよ。もう一つはこういうふうにしていこうと。こういうイメージがあるわけですよ。それで、これにふさわしい役割を持つ人というのが、これは例えばよきキーパーソンだと。よきキーパーソンという人が、既に今ここにいますよね。この人たちにこういうものに参加してもらって、こういうふうというイメージですかね。こういうプログラムを一つ考える必要があるでしょうと。このよきキーパーソンは受けた人より、受けてもらいたい人でしょう。

受けてもらいたい人ですよ。皆さんの頭の中にこういう人がボラセンの運営をしたらいい、運営できるだろうなという人に、具体的な知識だとか、そういうものをプログラムとして与えていくのでしょうか。このよきキーパーソンの前の段階で、多分やる気のある、素直なんでしょうか。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

素直というのは、僕はイメージとして要らないと思う。やる気のある人。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

協調性がある人。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

見る人によって素直というのは違いますからね。指示する人にとっては素直なだけであってね。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

やる気のある、よき人という。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

要するに価値判断が入るような言葉は。キーパーソンは限定できるからね。研修の話だから、よきとか悪いとかと言ってしまうと、何かかなり狭める危険があるのです。極端なことをいえば、悪い人でも研修は受けてもらった方が。

よき人といったら、やはり対象を限定してしまうから駄目ですよ。やる気のある人だったら、おれはやる気があるのだと。キーパーソンだといったら、おれはキーパーソンだと。そいつが悪いかどうかは、また別の話で。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

地域住民ということでしょうか。地域住民がいるでしょうと。でも、こういう、普通そんな関心もなかった人が、1回ボランティア活動に参加して、こういうふうな気持ちをだんだん持って行って、こういうふうな問題を持って行って、だんだんこういうふうになっていくというのは、非常に望ましい、らせん状の階段を描いているというのは、望ましいことですよね。地域住民というのは、ここよりも下に置いた方がいい。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

でも、学生なんかは普段無関心でも、意識付けをすればものすごく力をだす。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

さらに無関心の人。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

学生なんかそうでしょう。大学生なんかは。それが神戸では駆け付けているわけだから。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

それは正確にいうと、平常時は無関心な人。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

平常時ね。だんだん何となく分かってきたような気がしますね。こういう感じで多分対象がいるだろうと。それぞれに合わせたプログラムが当然必要になってきますねということなのです。われわれサイドとしてはと。でも、こういうふうに登ることがすべていいとは言えないですよ。別に災害の、防災のボランティアに関心をそれほど持たなくても、別のことでノーベル賞を発見すればいいわけだから、決してこれはよき、悪いという話ではなくて、こう上がっていくべきだという話ではないということですよ。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

もう一つは、本人はスキルが上がって行ってるつもりでも、客観的に見るとそうではない。本人はみんな良きキーパーソンだと思っている人が地域にいっぱいいて、難しいところもあります。だから研修をする対象として見るときに、どこで線を引くかというのが難しいと思うのですよ。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

例えばの話で、三角形の頂点に企業、経団連を含めて企業住民、もしくは地元の首長を含めて、議員を含めて、知ってもらいたいトップの層から、最底辺の無関心学生の層までの三角形の真ん中に、例え

ば専門職集団みたいな、一定の知識・技能を持っている集団をコアとして、動機付けをやっていくみたいなモデル。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

啓発まで含めるかどうかというのは、ちょっと考え方は整理しておいた方がいいですね。つまり、知らない人にそれを教え、知らせるという役割を。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

建築事務所協会だとか、不動産貸付業界だとかから呼ばれて、私たちはボランティアとして何ができますかという話を要請されるけれども、私はそういうふうに考えています。専門職としてできる活動。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

強引にまとめていきたいと思います。先ほどの第4回の分科会1の資料で書いてあります。先ほどちょっと福田さんがおっしゃってくださった、こういうものはここに合っているのではないかというようなものがありましたよね。人と防災未来センターの研修というのは、恐らくこのやる気のある人ではなくて、よきキーパーソン向けぐらいの、人防のレベルが多分ここにあるのではないかということが。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

そこばかりをやっている気がします。対象者は違うのに。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

人防（人と防災未来センター）はここを狙って、この人を対象にここの研修をやっているという意味ですか。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

人防の講座が悪いといっているのではないですよ。ただ、率直に思うのは、どこの研修も今多いのは、「よきキーパーソン」向けの研修を、「関心のある人」にやっているものだから、いまいち伝わらなかったり何かイメージがわかなかったりしているのではないかなということです。

対象者と内容のミスマッチというのですかね。内容は「よきキーパーソン向け」なのだけれども、受講している人のほとんどが、「関心のある人」になってしまっているから。そんな気が僕はしています。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

そういう意味では、人材育成に関しては、どこの範囲に絞るかですよね。要するに、ある程度の層、だから関心のないところまでは、そういう人というのは、むしろ教育ではないけれども、ある程度、無

理やり教えてしまうような話が人材育成かといわれると、多分、用語との関係でいくと、やはりある程度関心のある人以上でしょうね、人材育成となればね。それと同時に、もっと重要な要素があって、実際に動ける人というのがあるのではないですか。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

でも、言葉遣いを丁寧にやらないと、例えば動ける人というのは、身体機能でみると誤解を生む。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

時間のある人。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

機動力。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

例えばよく講座でやっても、若い人が全然いないと、やはりみんなが盛り上がらないから、そのイメージだよな。実際に動く人だから。実際に動く人か。だから、若い人になるのかな、そうなる。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

やはり学生だと思うのですよね。例えば横浜なんかを見ると、昼間人口が2割くらい少ないのです。ほとんど学生ね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

都会には学生がいるのですが、田舎にはいないのですよね。ということは、養成できないという話になってしまう。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

でも、いるじゃないですか。高校生だって、小学生だって。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

やる気のある、動ける人。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

まあ、そんな人たちに対して講座をやっても、成り立たないでしょうね。学校がやってくれればいい

のですが、僕たちが企画をして、そこに受講に来る中学生、高校生がいるかという、いないと思います。人口のすくない地方ではちょっと現実離れしている。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

私はやっぱり前のこれね。表でうまくまとめているところがあるから、やはりこれにこの要素を張り付けて膨らませることは、いいと思うのですよ。だって今、この時間よりも、こっちの方が時間をかけて、まとめてきているところもあるから。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

これはボランティアセンターの運営。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

だけではなくて、ボランティア活動に関する育成事例とか。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

そうなのですけどね。ちょっと、例えば私はこの5とかに、非常にそんなものかなという。5ページのところの表4などは、こう書いてありますけれども、無理やり分けていますが、これはあまり意味がないかなと思っているのです。この4のところ、やりたがるのですが、やったところで結果はどうなのかといったら、それよりも実際に皆さん方が地域で、こういう人にリーダーになってもらいたい、こういう人が来てくれたらありがたい、そのためには普段から何をやっていくべきなのかということ、あらためて表にしたいなという気持ちはあります。実際に今ある研修事例というのは。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

今、山本さんが少しヒントをくれたのかなと思うのですが、研修はいつも人を集めるじゃないですか。だから、本当だったら、人がすでにいるところで実施する。そこに行って実施するのが一番いいに決まっているのですよね。そこにはもしかしたら、「無関心な人」から「よきキーパーソン」まで全部がいるかもしれない。人がいるところに、こちら側がアクションを起こして行くということができるといいのではないかと思います。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

私なんかの感覚でいうと、この辺、日常に地域活動を行っているわけですよね。地域にいて。でも、こちら辺の人（地域住民）というのは、やはりこの中（地域住民）でも、この中で、この地域をまとめてほしい人がいるので、ここ（地域）のところで、ここ（地元）のセンター運営には来なくても、ここ（地域）で地域のコーディネートをしてくれる人が欲しいときには、そういう講座をやって、あとはここ（地域住民）は自分たちが被災しないために、被害を少なくするために皆さんに知ってもらいたい研修をして。なおかつ地域で地域のコーディネートを、この人に言ったら、この地域はまとまるとか

というような人の分（自治会長や民生委員など地域で一目おかれている人）と、あとはセンター運営にかかわってくれる、例えば専門（技術・技能を持った）の人たちに、専門の研修を通して、この中（災害支援）でこういうステージのときに、あなたたちのこの能力をこういうふうに生かしてきてほしいという、今までの事例ではこういうことがありましたよという研修内容を、大分県災害ボランティアネットワークの団体にはそれぞれ専門性を持った人たちがいるので、その人たちにはその研修をやって、なおかつセンター運営に来てくれるような人たちは、また違うネットワークで研修をやるという形で、対象者によって講座の内容が変わってくるという。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

私が神奈川県でやっているのが、村野さんが言ったように、その下の丸の上に、その要するにメンバーの中からセンターに入れる人、それで地元と連携を取れる人を真ん中に私は位置付けているのね。そこをリンクする人を真ん中に。半分の丸でいいから。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

これはでも、無関心な人には被災しないということが、最大の重要な支援ですね。この人が被災しなければね。非常にこういう人にアプローチがないのかというと、いや、被災しないための具体的なアプローチをしていきますというのが。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

被災しなかったら隣近所を見てねということで、輪は広がるわけだから。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

これは、どちらかというと、こういう人をセレクトするというよりも、こちらから働き掛けるという、その部分が大きいのだということですね。

物理的にいる場所に出かけていく。やはり出前ということですね。出前する。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

大学でやっていますが、すごく学生の変わり方がいいのですよね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

現状課題として、講座内容と受講対象のミスマッチがあったというのは、多分すごく重要なポイントだとは思うのですよ。やはり言ってしまうと、高度な講座をみんなし過ぎている。もう1ランク実は下げなくてはいけないのだけれども、もう1ランク下げるプログラムが何なのかがいまいまだ分からない。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

それは被災しないための活動。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

被災しないためのというのは、ボランティアセンターの講座でもなくて、もっと基礎的な防災講座。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

高度な講座をしているというよりは、やはりそういうことをしてくれる人を対象にしていないということだと思います。というのは、ボランティアセンターというのはそんなに高度なのかなという、もう一方の世界があって。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

ボランティアセンターを担う人というのは、そんなに高度な能力が要るのかなと。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

センター長は別にして、ある意味では、誰でもできる仕事ではあるんだよな。やる気さえあればね。

「振り返り・まとめ」

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

そうすると、まとめでちょっと考えなければいけません。まずわれわれが取り組んだのは、新潟県中越地震の経験から、こういう人材が必要である、こういう人材が大切だということを学びました。今ある講座というのは、恐らく講座の内容と受講者がミスマッチしている例があるのではないかと考えていますと。それは整理してみると、こういうふうにやるべきだと。要するに上を高くしていく部分については、こういう人に受けてもらいたいし、真ん中ぐらいのところでは、こういう人に受けてもらいたいし、すそ野を広げていくという部分では、こういう形で出前をしながら、関心のある人を。これがちょっと面白かったので。こういう人たちが日常の地域活動を支えていくのですよというような。だから、こういう人はいい意味で、別の意味で地域のキーパーソンと。こっちは例えばボラセンのキーパーソンだとすれば、こちらは地域のキーパーソンなのかなという感じもしましたけれども、こういった形でまとめました。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

その地域のキーパーソンの中から、よきキーパーソンが出ていくで、左側に行っているよきキーパーソン以下のボランティアを支援する人までの層を、私は下の丸の中でイメージしてもいいと思うのですよね。その中に。そのところをしっかりと押さえれば、よきキーパーソンがその中の。

そういう平常時の活動をしながら、災害時に活動できる資質を持った人が、その上のよきキーパーソンに、そこから登っていくという。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

この解釈論をやると、また延々とかかるし、意味ないから。だから、要するに人材育成の今回のまとめに資してやると、まず研修である以上は目的があるわけですね。その目的と対象と中身が、その辺の整理になってくるのではないですか。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

これは特に言う必要はあまりないのかもしれないですね。今のが具合が悪いと言う必要はなくて、実はよきキーパーソン向けの研修というのが必要でしょうと。例えば今、人防でやっているような研修というのは、どちらかというと受けたいという人を集めるのではなくて、受けてもらいたいという人を、それこそ都道府県なり社協さんから推薦してもらってやるような形が望ましいのではないのでしょうかというような提案はできるかと思います。それから、例えば防災経験もあって、やる気のある人たちというのが、これから支えていくような人たちなので、この人向けにある程度の研修をしていくと。でも重要なのは、このすそ野を広げるというこの研修であって、関心はあるけれども、あまり防災の知識がない、地域のまとめ役ではあるけれども、まだ防災のことをよく知らないという人たちが、実際にはボランティアとかを動かすときには、非常に重要な役割を担うことになるので、この人たちに出前をしながら働きかけていきたいと思いますというイメージですね。無関心な人については、放っておくのではなく、被災しないためのさまざまな気付きを促すようにしていきましょと。そのような形でこれからの人材育成というものを考えていってはいかがでしょうかという形でどうでしょうか。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

それはトータルとしての人材育成という視点なのかな。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

そうです。最終的にはトータル。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

「災害ボランティアの養成講座」という名前で講座を企画することが多いじゃないですか。そういう講座をやりたいという人が相談に来たときに、よく言うのですが、「災害ボランティア養成講座」ではなくて、先ほどそれこそ山本さんが言ったように、「防災市民講座」でいいのではないですかという話をよくしています。「災害ボランティア養成講座」という名前を付けてしまうと、何かある特殊なイメージを持たれてしまうので、「防災市民講座」でいいのではないかと。「防災市民講座」の中で、災害ボランティアの要素も少し入れながらやっていけばいいし。

「防災市民講座」をやったら、絶対に災害ボランティアセンターの開設訓練など災害ボランティアに

特化したプログラムはできないはずですが。だから違うプログラムをやることになるのですが。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

でも、結局はその順番を追わないで、いきなりセンター運営とかにするから、全然頭にイメージもできないまま行ってしまうので、その前段が今まで抜けているのですよね、市民の方に対しては。

それをやって、徐々にイメージが湧くような人たちが行くといいのですが、いきなりそこから行ってしまうのですよね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

でも、今の議論でいくと、「災害ボランティア」イコール「ボランティアコーディネーター」かと言われると、それは違うのですよね。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

結局、その中でイメージが湧いてコーディネートできる人が、そっち（災害ボランティアセンター）に先に行くとかになればいいのですよね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

逆にいうと、災害ボランティアというと、センター運営する人に特化されているところがありますが、でも、実際はそんなのは数の上ではごくごく少数で、やはり地域で実際。センターはあくまでセンターだから、動いている人たちというのはちょっと違うということですね。やはり独自のジャンルですよ。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

特に東京などだと、池上さんはよくご存じだと思いますが、災害ボランティア養成講座とかをやると、東京消防庁の災害地支援ボランティアの方々なんかがよく受講されます。しかし、彼らには災害ボランティアセンターの運営という感覚がないケースが多いと思います。全然ないのですよ。災害ボランティアセンターの話をする、「？」という感じになってしまいます。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

要するに地域でやと思っているから。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員 / 財団法人市民防災研究所 理事）

あれは支援だからね。消防官の支援をするボランティアだから、また狭いのですよ。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

話が混乱しているけれども、要するに生活支援からが災害ボランティアだという考え方と、いやいや、発災対応から始まるのだという考え方と。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

そこがやはり、すごくずれてしまったりもするのですよね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

だから、そういう意味では多様に用語が使われているのですが、少なくとも今の災害ボランティア講座というのは、コーディネーター講座に偏り過ぎているのは事実ですね。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

先ほど村野さんがおっしゃったように、社協が防災市民講座をやったら、受講者のほとんどの人が、「なぜ社協が防災をやるのか」と不思議に思うのではないかと思います。そこで、「最近社協も防災をやるんですよ」ということを、社協の職員が地域の人に言って行って、「ああ、そうなの」と思ってもらうことが先決のような気がします。「それで何をやるの、社協は」となって、「いや、実は災害ボランティアセンターというのをやるらしいんだよ」と流れていくのが自然な気がします。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

ボランティアと付かないと社協は駄目だよ。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

そこから入らないと、いきなり災害ボランティアセンターを社協がやるので、受講をお願いしますというのは、ちょっときついなという気がします。社協が「防災市民講座」を企画するのは、とてもいいことだと思います。防災課と一緒にやればなおいいと僕は思っています。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

一番今のがつらいところで、防災課と組んで動けないという。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

でも、ほとんどそうですね、組んでいますね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

組めていないところも多いです。名目が、例えばボランティアという単語が付くか、もしくは要援護

者という単語が付かないと、社協はできないというのは、社協の職員が毎回悩んでいます。普通の防災市民講座でやれよと企画書まで出してあげるのですが、それでは、社協の内部でお金が下りないのです。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

多分それは防災という感覚で、それが地域福祉を推進しているというイメージがないからでしょう。日常からちゃんときちんと。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

いや、それは担当者まではあるのですが、お金を下ろす上の人が、その考えがないので。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

でも、山本さんのプログラムの中で、さすがというか、すごいなと思ったのは、講師のところにちゃんと防災課がいるじゃないですか。県の災害防災室とか。市とか区の防災課にしゃべってもらえばいいじゃないかと思います。1時間とか、30分とか。防災課だって20人、30人しか受講者がいなくたって、市民・区民に直接しゃべれる機会なんかそんなにないのだから、喜んで来てくれると思いますよ。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

喜んで来てくれる防災課の職員もいるのだけど、すごく嫌がる人もいる。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

そこはさすがに仕事として頑張ってもらわないと。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

今は人を減らされているからね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

要するに自分たちのテリトリー以外まで出向いて行く暇が、社協さんだったらそっちでやってよというね。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

いや、そんなことないですよ。今は全然そんなことはないですよ。基本的には、都内に限ればですが、ほとんど来てくれますよ。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

地方はきついですね。いまだに東海地震とか東南海地震の強化地域の市でも、防災担当と交通課が兼務だったりしますからね。えー？と思う。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

東京のレベルは、言えば、日にちさえ合えば来てくれるけれども、地方へ行ったら。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

地方でも来てくれると思うのですけどね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

来てくれるところが多いですよ。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

役所の中よりも、周辺にプロがたくさんいるということもあるのね。大学の先生もいれば、研究者もいれば、実践者もいるから。

だって、2～3年で替わっているから。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

あれだったら、別に資料を配るだけでいいじゃないかという話を1時間かけてされると。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

それこそ行政の職員を市民が鍛えるという意味でも、しゃべってもらわないと絶対に駄目ですよ。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

しゃべるのが得意な人というのは限られているよね。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

なるほど。それも人によるんだよね。防災課で、もうしょうがないなという人は来ないし、よしやるぞという人は、社協に話をして、機会があったら言ってねと言うだけだものね。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

市民や区民への声がないというのは、それは駄目じゃないですか。だって、お願いしているのですか

ら。自助、共助が大切と言っているのですから。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

地域を表現するのが難しいな。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

もう今、私は防災課ではありません。経理課の課長で。出前をして働き掛けるということ。これは大事なポイントは、被災しない。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

被災しないし、日常からの見守りとかがすごく大切。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

結局、今年の防災まちづくり大賞の総務大臣賞を取った団体は、出前だよ。防災は地域に入っていかなければ駄目だというね。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

この狙いは、被災しないこと。

村野（大分県社会福祉協議会 大分県ボランティア・市民活動センター 専門員）

やはり日常から見守り活動とかが自然と起こらないと、なかなかできないのですよ。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

この人たちの狙いはどういうところに。関心のある人にはぐっとうこういうふうな形で広げてもらいたいわけですね。これに三重とか大分のプログラムが、例えば例としてはありますよというふうに言えばいいですかね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

うちのプログラムは、今はもうちょっとやる気のある人向けに変わってきているかな。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

そうですね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

うちは小論文も書いてもらって、しかも、年間1万円取っています。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

そうですね。そう考えると、三重はもしかすると、もう少し。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

やる気がないと、さすがに来てくれない。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

それでは三重は、三重じゃなくて、私は山本さんの講座を見ていたのだけれど。それから、地域のパターンがいいな。どうしようかな。これが地域ね。こういう感じですね。このイメージを上手に説明できるかな。まあ、こんな感じで。それで、やる気のある人、動ける人。その前に動ける人、やる気のある人。一緒にしていいですね。やる気のある人、動ける人と入れてしまえばね。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

あと、やる気のある人、動ける人もそうだけれども、聴ける人ですよ。聴けるは耳へんの方ね。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）

傾聴は大事ですよ。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

でも、聴ける人というのは、やや差別的になるんじゃないですか。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

そんなことはないですよ、これは。心をもって受け止めるのが「聴く」だから。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

最後にぱっというと、大体通るというのがありますよね、会議では。素晴らしいと思います。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）

あと、どこかに専門職集団ですよ。

山本（特定非営利活動法人みえ防災市民会議 議長）
専門性はこういう作業でいいのではないですか。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
鍵屋さん、室崎さんを重視するわけではないですが、やはり被災者とか被災地とか、どこかにないと。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）
人材育成の提案。被災地支援のためにと、ここに入れて。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
被災地とか被災者がないと、この人材育成は単なる、すべての人材育成の一般論になってしまう。それがないと一般的な人材育成で、どの分野でも同じになってしまうから。やはりこの分野がなぜボランティアかといわれれば、このお題目があるからだよ。これがないとボランティアではないんだよ。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）
ボランティアという言葉は何もないですね。そういえば皆さんの。これ、いいですね。ここにちょっとあるだけですけれども。

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）
でも、これはボランティアセンターの話ですよ、基本的に。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）
新潟県中越地震の経験から。ボランティアセンターだけではないということは、確かに重要なのですよね。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）
何の人材育成のところに、災害ボランティア人材育成の提案。何の人材育成なのかと聞かれるから、やはり。

秦（横浜災害ボランティアバスの会）
サブタイトルがあるじゃないですか。被災者、被災地をよく支援するために。ボランティアという言葉は、ボランティア、関心のある人、無関心な人。

池上（財団法人日本YWCA 常任委員／財団法人市民防災研究所 理事）

これ自体が防災ボランティア活動検討会における分科会の人材育成だから、それはいいのですよね。全く知らない人が見たときに、ボランティアがないじゃないとなるとあれだけど。それは心配ないと思いますよ。被災者、被災地をよくする支援のためにといたら。

澤野（災害救援ボランティア推進委員会 事務局長）

ボランティアを支援する人が書いてあって、ボランティア自身が。トータル概念か。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

こっちはどちらかというと、研修担当者だとか、人材プログラムを作る山本さんのような人を何といいますか。研修企画者とかというのが普通あれですが、何というのですかね。ボランティアを支援する人？教育関係者？

福田（特定非営利活動法人東京災害ボランティアネットワーク事務局）

研修とか育成主体というか。研修講座主体でもいいですが。

鍵屋（特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト）

はい、では、会議が終わったということで、本当にファシリテーターの不手際も多く、皆さま方の思いを十分に形にできていないということを、まずはおわびしなければいけないですが、議論として大変面白い議論が展開できました。それぞれの思いもよく伺わせていただきました。一応こういう形で発表させていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。ありがとうございました。